

平成紙



おりおりの記

紀元二千六百年—その二

公益財団法人 資本市場研究会
顧問

長岡 實

司馬遼太郎のいう「魔法の森」の時代のことを、戦後生まれのひとが理解できるように説明することは不可能だろう。言論の自由も思想の自由も認められなかった。いまでは考えられないような時代のことである。

司馬のいう「昭和という国家」（昭和20年まで）の時代には、神話、伝説がそのまま歴史的事実として継続していったような面があった。いつまでが神話伝説時代で、いつから歴史の時代になるのか、はっきりしない。考古学、歴史学の将来にその鍵をゆだねるしかないが、歴代天皇の初代にあたる神武天皇からわが国の歴史がはじまるように、何となく昔の日本人も考えていたような気がする。

もう一度、歴史年表の登場。「712年『古事記』なる（太安麻呂）」と載っている。平城京（奈良）に遷都した元明天皇の時代である。古事記によれば、初代の神武天皇の137才から、第15代應神天皇の130才まで、15代のうち7代の天皇が百才以上まで御存命と書いてある（福永武彦、現代語訳による）。もちろん若くして亡くなられた天皇もおられるが、百才以上というのはやや神話伝説の

世界に足を踏みいれているようだ。

神話伝説をもつ国家、民族は、それを誇ってもよいと思う。わが国の場合には、旧約聖書の向こうを張って、イザナギ、イザナミの神の国づくりまで神話に入っている。ただ、古ければ古いほどよい、というものではない。司馬遼太郎のいう「魔法の森」時代の日本は、古代と現代のちがいもなく、国をあげて「紀元二千六百年記念式典」をとり行う、リアリズムの欠けた時代であった。

最近、魔法の森の時代を知らないひとのなかに、戦前の日本に戻ろうという動きがあるように思われる。戦前の世界は、まだ帝国主義、植民地主義が尾をひいていた時代だったといえよう。19世紀後半に、それを阻止しようとしたのが『明治という国家』であり、20世紀に入ってしばらくしてから、その仲間に入ろうとしたのが『昭和という国家』だったのかもしれない。

いずれにしても、明治維新前後に来日した外国人が口をそろえて褒めちぎった日本人の美德（礼儀正しさ、親切、正直、清潔など）は何とかとり戻したいものである。